

日野祭曳山囃子における雅楽曲の摂取について

齊藤 尚

滋賀県蒲生郡日野町では馬見岡綿向神社の春の例祭として日野祭が行なわれる。日野祭では神子と呼ばれる稚児の行列や神輿の渡御と、各町内から曳き出され、馬見岡綿向神社へと向かい、また町内へと戻っていく、曳山の行列の二つの行列が特徴的である。その曳山の巡行には囃子が行なわれる。主となる巡行の曲は江戸囃子系の曲が用いられているが、宮入の際には江戸囃子系の曲以外の独特な曲が用いられることが多い。宮入の際の曲には雅楽から取り入れられたと考えられる曲がいくつかある。現行曲は一曲だが、残されている譜面や録音から確認できる曲が三曲ある。これらの曲を取り入れることとなる機会として文化元年に馬見岡綿向神社で行われた、舞殿再興の儀式が考えられる。この儀式では雅楽の演奏が行なわれており、楽人は日野の町人である。天王寺や南都の楽人から伝授された町人が雅楽曲を曳山囃子に取り入れたのではないかと考えられる。

〔キーワード〕馬見岡綿向神社、滋賀県日野町、江戸囃子、賀殿、陵王、唱歌譜

本稿では滋賀県日野町で行われる、日野祭における曳山囃子について考察する。日野祭の曳山囃子は主となる巡行に用いる曲が江戸囃子系であることや、近隣の甲賀市で行われる水口祭の曳山囃子と類似する点が注目されてきた。また、宮入りの曲などは、江戸囃子系でない曲が含まれている点にも言及されてきた。

この江戸囃子系でない曲のなかに、雅楽の曲を元につくられたと考えられる囃子がある。これらの曲について残されている譜面と、雅楽の龍笛譜を比較し、その共通点を検証する。さらに、なぜ曳山囃子に雅楽曲が取り入れられたのかということを考察する。

一 日野祭について

蒲生郡日野町は滋賀県の東南部に位置する。東部に綿向山を頂き、綿向山を水源として北に佐久良川、南に日野川が流れ、ほぼ中央には東西に長い市街地がある。この市街地の東端に馬見岡綿向神社がある。

この馬見岡綿向神社の春の例祭が日野祭であり、昭和六十年に「日野曳山祭」として県の無形民俗文化財として指定された。現在では毎年五月二日に宵宮、三日に本祭、四日に後宴が行われる。

日野祭は御旅所と馬見岡綿向神社を往復する、神子と呼ばれる稚児の行列や神輿の渡御と、各町内から曳き出され、馬見岡綿向神社へと向かい、また町内へと戻っていく、曳山の行列の二つの行列が特徴的である。馬見岡綿向神社の氏子地域は大字西大路・村井・大窪・松尾・上野田・

木津・日田・河原であり、このうち曳山を出す町が大字西大路・村井・大窪にある。

神子の行列は大字上野田が担う。大字上野田には「神調社」という組織があり、この組織が日野祭の進行を制御する。馬見岡綿向神社の祭神は出雲系の神であり、大字上野田には出雲氏を祖先とするものがいたため、神輿を先導するようになり、これが神調社の由来であると語られている。神調社は神子と呼ばれる稚児を中心にして五社神社から馬見岡綿向神社へと向かい、本殿祭典の後、神輿を伴って大字上野田にある雲雀野と呼ばれる御旅所へと向かう。そして御旅所で神事をを行い、また馬見岡綿向神社へと戻っていく。渡御の間や神社境内、御旅所では芝田楽と呼ばれる太鼓が打ち鳴らされ続ける。この太鼓を打つ音を合図に日野祭は進行していく。太鼓のことのみならず、神調社の集団のことも芝田楽と呼ばれる。現在では太鼓の音のみで芸能は行われていないが、(日野町史編さん委員会編 二〇〇八・四五九―四六〇)では、その名称から、本来は風流拍子物系統の芸能が行われていたのではないかと考察されている¹⁾。

二 曳山囃子について

次に曳山囃子について概観する。

日野祭において曳山を持つ町は大字西大路上組・西大路下組(曳山は一つで毎年交代で曳山を受け持つ)、大字村井の本町・新町・越川町(大字大窪の越川町と合わせて一基の曳山)、大字大窪の清水町・双六町・河原田町・今井町・仕出町・杉野神町・上鍛冶町・金英町・南大窪町・岡本町・大窪町・上大窪町・越川町(大字村井の越川町と合わせて一基の曳山)で、合計一六基である。過去には他にも曳山を持っていた町があったようである。そして、この曳山のすべてが毎年巡行するのではなく、各大字(西大路・村井・大窪)に一基(大字大窪は隣の大字松尾と共有)の神輿があり、神輿の当番が回ってきた町は曳山を出さない。

曳山そのものについては、見返幕や細かい彫刻など、日野商人の財力

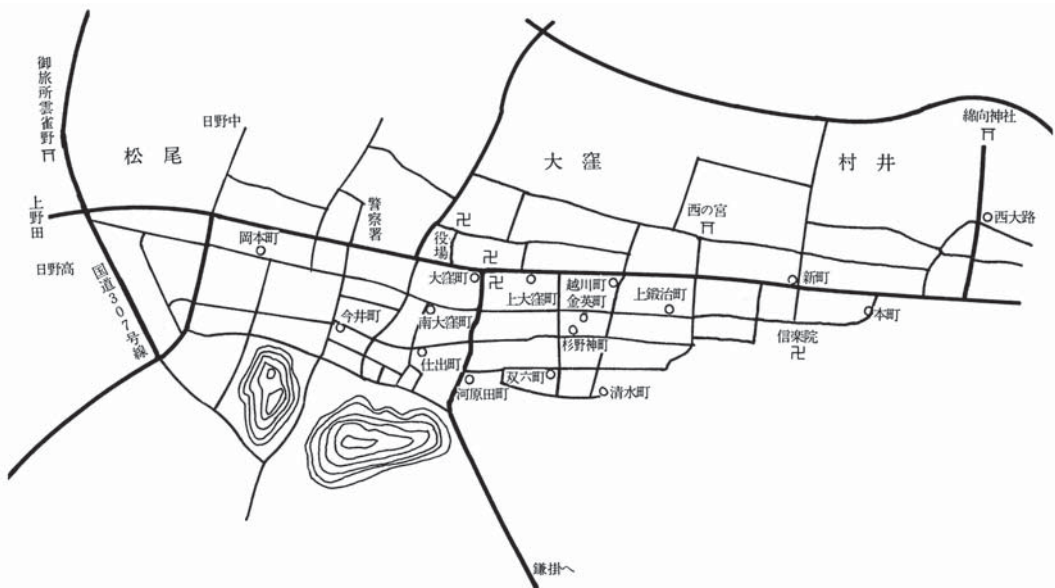


図1 曳山所有町と馬見岡綿向神社・雲雀野の位置 (日野祭調査委員会編集 1977: 187より転載)



写真1 宮入の様子 馬見岡綿向神社の境内に曳山が入るときに、主となる巡行の曲とは違う独特な曲を演奏する機会が多い。

による豪華な曳山であり、曳山の上にはダシと呼ばれる作り物を毎年新調して載せるなど、注目すべき点が多い。ここでは多くは述べないが、〔日野祭調査委員会編 一九七七〕や〔日野町教育委員会編 一九九〇〕、〔日野町史編さん委員会編 二〇〇七〕、〔日野町史編さん委員会編 二〇〇八〕に詳細に示されているので参照していただきたい。

曳山囃子に使われる楽器は笛・大太鼓・小太鼓・摺鉦である。笛は七孔の篠笛で主に六本のものを用いる。西大路下組の「神楽」という曲では龍笛を用いている。太鼓は大型の締太鼓又は胴太鼓と小型の締太鼓（能

楽の囃子などで用いられるもの）を用いる。摺鉦は手で支えられる程度の大きさで、膝の上に縦に置き、手で支え、へこんだ面を撥で打つ。かつて大窪町の「賀殿」では、摺鉦を木枠に吊って演奏した。曳山の巡行の際は、大太鼓一名、笛二〜三名、小太鼓・摺鉦各一〜二名程度が曳山に乗り込んで演奏をする。大太鼓以外の人数は、各町曳山で増減する。

曳山の巡行の際は、いくつかの種類の囃子が演奏されるが、それぞれに役割がある。各町から馬見岡綿向神社へ向かっていく「上り山」、曳山の方向転換（「ぎんぎり回し」と呼ばれる）、馬見岡綿向神社境内に入る「宮入」、馬見岡綿向神社から各町に帰っていく「下り山」やそれぞれの場面で曲目が決まっている。「上り山」では速いテンポで賑やかに囃したてる「バカバヤシ」、「ぎんぎり回し」では「ヤタイ」、「ぎんぎり回し」が終わった後や曲と曲のつなぎとしてややゆったりとしたテンポの「オオマ」^②を演奏する。ここまでは各町で共通している。「下り山」では、かつての流行歌や民謡を取り入れたと思われるものなどや、「上り山」と同様、「バカバヤシ」や「オオマ」を用いる町もある。「宮入」は各町で特別な曲を用いたり、「下り山」で用いる曲を演奏したりする。ゆったりとして落ち着いた雰囲気曲が多い。「バカバヤシ」を用いる町もある。

〔田井 二〇〇一〕や〔田井 二〇〇五〕、〔日野祭調査委員会編 一九七七〕や〔日野町教育委員会編 一九九〇〕、〔日野町史編さん委員会編 二〇〇八〕などの先行研究では、「バカバヤシ」・「ヤタイ」・「オオマ」や「下り山」の曲の名称や雰囲気江が江戸祭り囃子と共通する点、一方、宮入の曲には江戸祭り囃子系統とは違った独特な曲がある点、また共通点が多い水口曳山祭の曳山囃子との関係性が注目されてきた。日野祭の曳山囃子では宮入の曲を重要視し、他の地域にはない独特な曲がある。その一つ、雅楽を元にしたと思われる曲について、次項で見えていく。

三 雅楽を元にした曲について

1 現行曲「賀殿」について

大窪町には宮入の際の曲に「賀殿」^③という曲がある。曲名からして雅

楽曲の「賀殿」と何か関係があることが明らかである。この曲は一度は演奏されなくなったが、かつて笛を演奏していた古老から伝承を受け、楽譜も残っていたことから、幸いなことに現在に伝えられている。大窪町に残されている「賀殿楽譜」(昭和三十三年三月改訂再録)と龍笛の現行譜(東儀文礼編「雅楽集 龍笛譜」鳳明会 明治二十七年発行 以下、現行譜はこれを用いる。)の「賀殿急」(忝越調)との唱歌の比較を左に示した。

右行に「賀殿楽譜」の唱歌を原本のままゴシック体で示し、左行に現行譜の唱歌を「賀殿楽譜」に対応するように示した。なお、現行譜は文字の大小によって音の長さを示しているが、「賀殿楽譜」に対応させるため、文字の大小は示さなかった。

ツリーーラアハリラーア、ハー タア、、ハーチーイルリー
ツリ ラ ハリラ タ ハアチ イリリ

ツリーーラアハリラーア、ハー タア、、ア、、ローラルロー
ツリ ラ ハリラ ア タ ア アルラ

イチーイーリー ラアーリホラー ツリーーラアハリラーア、ハー
チ リイ ラア リホラ ツリ ラ ハリラ ア

タア、、ア、、ーハ ハーリイヤラター タア、、ハーアーローヲ、
タ ア ハ リイヤラタ ア ハ ラ

タリーイローヲ、リーイ、ローヲ、ホーヲ、ホー
トラ ロ リ ロ ホ ヲ引

イチーイ、ラーラローヲ、ホー
チ イ ヤ ルラロ ヲ

トーヲ、ヤーローターアルラハー タア、、ア、、ーハ
タ アハラ アルラ タ ア ハ

ハーリイヤラター タア、、ハーアーローヲ、タリーイーローヲ、
リイヤラタ ア ハ ラ トラ ロ

リーイ、ローヲ、ホーヲ、ホー タア、、ア、、アーア、、ルーラ
リ ロ ホヲ タ ア 引 ルラ

リーイ、ターラーローヲ、ホー トーヲ、ヤーローターハ
リ タラロ ヲ ト ロタ

ハーラーロー トヲ、、リーヒーイ、イ、、ーヒー
アラロ ト リ イ引

「賀殿楽譜」の唱歌の文字は、はっきりとした音価の対応はされていないが、ほぼ現行譜の丁度半分までと対応している。実際の演奏を聞いても雅楽の忝越調「賀殿急」の龍笛の旋律を取り入れていることが明らかである¹⁾。

また、「賀殿楽譜」には大窪町で演奏されている部分を「上之巻」とし、続けて「下之巻」が記されている。「賀殿下之巻」は上大窪町で昭和五〇年代まで演奏されていた曲である。「下之巻」も「上之巻」と同様にほぼ現行曲の唱歌と対応する。ただ、昭和五〇年代後半に録音された、上大窪町の「賀殿下之巻」を聞くと現行譜の六行目に対応する部分を繰り返して演奏している。本来は「下之巻」全体を演奏していたものが、ある段階で一行のみに省略されて演奏されたのではないだろうか。

2 「陵王」について

金英町には「陵王」または「リョウ」と呼ばれる曲があったが現在では演奏されていない。この曲は他町に音律を盗まれないために練習所の

兩戸を固く閉じ、夜更けになってから練習したという〔日野祭調査委員
会編 一九七七二〇二二〕。これも「賀殿」と同じく、曲名からして雅楽
の「陵王」と関係がありそうである。

この曲の譜は越川町所有の資料の中に残されている^⑧。この譜と雅楽の
龍笛の現行譜を比較することで、相違点を探っていく。なお、金英町の
秘曲であると言いつたに伝えている「陵王」の譜が越川町に残されている
理由は不明である。越川町でも演奏されたとも考えられるが、言い伝え
も記録も残されていない。

タアラルロルヲロ トルロホ トヲ ロタアハラロ タンハリヤリ
 タアラルロル トルロホ トヲ ロタ ハラロ タ ハリヤリ
 タア、ハ、ア、タアラルリイイ タアロル口茶リホラア
 タア ハ ア タリヤルリヒ タ ルラチヤリホラ
 、ツランハラア 調ヲル トヲルロル口 リイヤラチイランハ
 ア タ ハラ チヨヲル トヲルロル口 リイヤラチイラ ア
 トヲラハリイタラロ トラリチイラロ ヒイヤリトリヒイ タランハ
 ト ラハリ タラロ トロラチイヤロ リ タラトリヒ タラ ハ
 ツラリヤリイヤラララハリイタラロ トヨラリチラロ
 トロラリヤ ラララハリ タラロ ト ロラチイヤロ
 タアリタロンホ タアランハアロ トヨリヒイ、半帖
 ト ルロロ ホ タラ ハ ロ ト リヒ イ
 タリヤロルリヤリ トヲルロルロリイヤラチイランハ
 タリヤラララリイヤリ トヲルロルロリイヤラチイラ ア

トヲルロホリラ チイリラアリララララハ タラロ ヲヲ
 トヲルロホリラ チイリラアリララララ タラハロヲ

タアロル口茶リホラア ア タンハリヤリ
 タララチヤリホラ ア タ ハリヤリ

タア、、、アハ、、、チイリラアハラアア
 タ ア引 ア ハ ア 引 引 チ リイラアハラア

タンハリイヤリ タア、、、ア、、、リイヤラフロウイロランホ
 タ ハリ ヤリ タ ア ハ ア チイヤラル ウイロ

ロイロランホ リヤリヤリ チイランハアラ タア、、、ハアアア
 ヲラリロヲホ チイヤリヤリ チイラ ハ ラ タ ア ハ ア

前出の「賀殿楽譜」と同様に唱歌の文字は音価の対応はされていない
 が、現行譜の四行目から八行目にかんがりの部分で共通している。文字そ
 のものは相違する部分もあるが、旋律としてはほぼ同じと考えてもおか
 しくはない。旋律が異なると考えられる部分は五行目の「ツラリヤリイ
 ヤラ」の部分と一行目一〇文字目からの「ランホロイロ」の部分であ
 る。雅楽の曲そのものではなく、オリジナルの部分を作ったのか、雅楽
 から移す際に誤ったのか、譜にする際に誤ったのかは不明である。他の
 相違点としては、まず、「ランハ」や「ロンホ」というように、「ハ」や
 「ホ」の文字の前に「ン」が入っていることが挙げられる。「ハ」や「ホ」
 は龍笛譜では「叩」という奏法をおこなう箇所であり、跳ねるように唱
 えるために「ン」が入っていると考えられるので、この点は旋律には影
 響しない。また、「茶」「調」という漢字があらわれるが、これは龍笛譜
 の「チャ」「チヨ」を漢字で示しているものである。

3 「前川楽」の分析

越川町には「前川楽」という曲がかつてあったという。前川氏が作曲した曲であるから「前川楽」であるという言い伝えがあるのみで、いつ作られた曲かということは不明である。現在では演奏されていないが、楽譜が残されている。

この楽譜は笛の唱歌と太鼓の譜を示したものである。左に笛の唱歌の翻刻を示した。唱歌の文字は籠笛の唱歌に用いられるものがほとんどである。文字の配列を分析していくと次のように見ることができるといえる。

合歓塩 3

チイヤラフ トロルロリイロタ アルラアルチイヤ

合歓塩 1

トヲ、ラライツトララルロロ チイリイヤリイヤタ
蘭陵王 9 他

トヲ、ララルロチヒリイロタアアアアア アアア タリイイロラ

合歓塩 5・6

ヒリリツリヒ トロルロリイヒ イリイリホイ チイヤラフ

合歓塩 2 合歓塩 3

合歓塩 1

ラアルラタルラ トロルロルロロ チイヒ アアルラ ヒリリツリヒ

トロルロチイヒ (アアルラ ヒリリツリヒ ■ロルロチイヒ)(墨消し)

一部の平調・太食調曲の最終行

イリイリホイ チイリイヤ リイヤタアアア ハアアアアア
(ゴシック体は対応する雅楽曲、数字は現行譜の行数を示す)

このように、合歓塩の唱歌の一部と似た唱歌が多くある。冒頭の「チ

イヤラフ」は雅楽曲の合歓塩の三行目「チヤラフロ」の「チ」のあとに「イ」があり、最後の「ロ」がないが、旋律としてはかなりちがいのがあると考えられる。また三行目と五行目にある「イリホイ」も合歓塩に含まれる旋律である。

さらに、二行目には蘭陵王などに見られる旋律、そして最終行の「リイヤタアアア ハアアアア」は、いくつかの平調や太食調の曲の止手の前にある旋律「チイヤタ」と止手に入る前の「叩」の奏法と同じ「ハ」までもがあらわれている。明らかに雅楽の旋律を取り入れて作曲したということが分かる。

4 その他の曲について

〔日野祭調査委員会編 一九七七・一九八一二〇一〕には「代表曲以外で楽譜が残されているものを二三参考に記載しておく」として「越後楽」「五常楽」「賀殿急」「金英町曳山囃子(リヨウ)譜(笛)」「越川町曳山囃子 前川楽譜」の譜が翻刻されて掲載されている。このうち「越後楽」「五常楽」「賀殿急」について検討する。「越後楽」と題がある曲の譜は明らかに雅楽の「越殿楽(平調)」の籠笛の仮名譜(唱歌の譜)に一致する。杉野神町に「越後」という曲があるが、旋律からは雅楽の「越殿楽(平調)」との共通点を見出すことはできなかった。「五常楽」はこれも雅楽の「五常楽急」の籠笛の仮名譜と一致する部分が多い。しかし、「五常楽」の曲名が曳山囃子としてかつてあったとは伝承されていない。「賀殿急」は前出の大窪町や上大窪町の「賀殿」に対応するが、譜の題が「賀殿急」であること、「賀殿楽譜」には用いられておらず、籠笛譜に用いられている「引」という文字が用いられている点が疑問である。以上の点から〔日野祭調査委員会編 一九七七・一九八一二〇一〕に掲載される「越後楽」「五常楽」「賀殿急」の譜は曳山囃子の譜ではなく、籠笛譜である可能性が考えられる。次項で述べるように、文化年間には日野町と雅楽の接点があることから、雅楽譜が町内に存在する可能性は大いにある。しかし曳山囃子に「越後楽」「五常楽」という曲があったという伝承がないからといって、その曲がなかったとは言いきれない。今後も

調査を続けていく必要がある。

また、西大路下組の曲である「神楽」では、篠笛でなく龍笛が使われている。龍笛は雅楽で用いられる笛なので、雅楽との関係性も考えられる。しかし旋律からはむしろ能楽の影響が感じられる。水口曳山囃子で大正末期に廃曲となった「カグラバヤシ」も龍笛を使用しており〔田井二〇〇五二二七〕、また、曳山囃子を龍笛で演奏する大津祭の曳山囃子との関係も想起させる。今後の詳細な分析が必要である。

四 曳山囃子に雅楽曲を撰取する機会

ここまで、日野祭の曳山囃子に雅楽曲が取り入れられていることを検証してきた。では、なぜ曳山囃子に雅楽曲が取り入れられたのか、またいつ頃から演奏されるようになったのだろうか。それを明確に示す資料は管見には入らなかった。ただ、「賀殿」については、大窪町で明治晩年頃には演奏されていたようである〔木田辰治郎・西村泰郎 二〇〇一〕⁽⁶⁾。日野町の人々が雅楽の曲を曳山囃子に取り入れる機会として考えられる史料が「馬見岡綿向神社文書」に残されているので、次に示す。

文化元年子三月廿三日舞殿移遷御戸代会祭式

肥後守経亮書

願主惣産子中

辰上刻有湯立里神楽

御戸代会并舞殿造畢儀

(中略)

次御戸開 神主紀明信 発音声 応止

次神饌及御戸代会供神物

(中略)

音楽 五常楽

(中略)

次撤神饌

太平楽 楽人退出

(中略)

次楽人着左楽屋 以舞殿東簀子擬左方楽屋

次賀殿 依舞殿造畢今年有賀殿但不右番

奉納舞人 南都 窪 美作守狗近章

次陵玉舞人 岡本町人馬見岡社人代役 中野五等大夫大神熊充

次楽人下殿退入

次楽人着右楽屋 以舞殿西簀子擬右方楽屋

次舞人参進于舞台

次納曾利 式□蹲任時宜 舞人社主計助紀明信

(中略)

次御戸閉 此間退音声 長慶子退出

次神主下殿退入

御戸開音楽越天楽

簫 内池町 外池太右衛門阿城宗純

同 粟屋町 村澤長右衛門狗正長

同 内池町 門坂和七郎太秦雍熙

簞築 杉之神町 高田一徳源敬心

同 堅地町 増田金兵衛源惟則

同 同 福井源次郎伊岐可昌

横笛 内池町 浜崎利左衛門菅原望海

同 越川町 前川治平狗充明

同 住本平野社入弟

同 桜木町 中西三右衛門大中臣量亮

同 後堅地町牧野氏

鞆鼓 大将軍町 後藤元策藤原守約

望海弟

鉦鼓 内池町 浜崎大五郎土師季吉

太鼓	越川町	佐治数馬平為雄	
賀殿陵王楽人			
笙	外池純	村澤正長	門坂雍熙
箏	福井可昌	増田惟則	佐治為雄
横笛	浜崎望海	前川充明	中西量亮
鞆鼓	後藤主約		
鉦鼓	浜崎季吉		
太鼓	杉之神町	中澤周平	
納曾利楽人			
狗笛	前川充明	中西量亮	浜崎望海
箏	窪近章	福井可昌	増田惟則
鉦鼓	浜崎季吉		
鞆鼓	後藤主約		
三鼓	石原町	西澤吉信	
太鼓	中澤周平		
御戸閉	退出	長慶子楽人	
笙	外池純	村澤正長	門坂雍熙
箏	福井可昌	増田惟則	佐治為雄
鞆鼓	西澤吉信		
太鼓荷	中澤周平		

(後略)

この史料は、文化元年（一八〇四）に馬見岡綿向神社で舞殿が再興された際の儀式の記録である。その中には儀式の進行に依りて奏楽や舞楽が行われている。「御戸閉」の際は「越天楽」、神饌を供える際は「五常楽」、撒饌の際には「太平楽」、「賀殿」「陵王」「納曾利」の舞楽、「御戸閉」の際には「長慶子」を演奏している。楽人の名前の上には所属している町名が示されているため、この演奏をしているのは町人であることがわかる。「馬見岡綿向神社文書」には、いくつかの伝授状も残されており、天王寺や南都の楽人に入門し、この儀式のために伝授を受けたこと

がわかる。しかし、すべての楽人の伝授状が確認されていないので、すべての楽人がこの儀式のために伝授を受けたのではなく、すでに雅楽の稽古をしていた町人が参加しているとも考えられるが、この点は、さらに調査が必要である⁸⁾。

文化元年の頃には既に曳山が存在しており、雅楽曲を伝授された町人が、伝授をうけた曲を曳山囃子の宮入の曲にアレンジしたのではないかと、いう可能性が考えられる。この儀式で演奏されている曲に、三にて分析した「賀殿」「陵王」、そして「太平楽」が含まれている点、その可能性を示している。「太平楽」は道行に「朝小子」、破に「武昌楽」、急に「合歓塩」を用いる曲であり、「前川楽」は「合歓塩」に共通する旋律が多い。特に注目すべきは、龍笛の演奏を行った町人の中に、「前川充明」という人物がいることである。越川町にかつてあった「前川楽」は前川氏が作曲した曲だと伝えられており（日野祭調査委員会編 一九七七・一九八）、この「前川充明」が作曲者である可能性も考えられるのである。

五 おわりに

日野祭曳山囃子は、以前から江戸囃子系であることに注目されてきた。これは日野商人が関東に出店を持っていることが多いことが、何らかの関係性があると考えられている。また、水口曳山祭囃子との共通性についても注目されてきた。そこで今回、雅楽の曲を元にした曲の存在およびその撰取の機会の可能性について示すことで、日野祭曳山囃子の独自性を見ることができ、また新たな注目点が提示できたのではないだろうか。

最後に日野祭曳山囃子の現状について述べておきたいと思う。

他の地域でも問題になっていることではあるが、日野祭の曳山を持つ各町でも子供や若者が少なくなってきたり、曳山囃子の後継者を育てることが困難になってきている。

そこで平成一九年（二〇〇七）に日野祭囃子方交流会が発足した。日



写真2 日野祭囃子方交流会の活動 各町の代表者が集まり曳山囃子の維持・発展について話しあう。また交流会での囃子の演奏も行い、様々な機会に普及活動を行っている。

野祭囃子方交流会は、曳山を持つ各町の囃子方の代表者が集まり、各町の囃子の伝承の状況を理解しあい、今後の囃子の維持、発展について考えていこうという会である。これまでは各町でそれぞれに伝承しており、他の町との交流は少なかった。これからは、各町が協力して日野祭曳山囃子を維持・発展していこうということである。また、各町で伝承されている曲や現在は演奏されていないが曲名が残っているものなどを調査し、各町の共通点や相違点を理解し合おうという活動も行われている。この中で、本稿で取り上げた「賀殿下之巻」や「前川楽」、「陵王」の復

曲についても、積極的に検討をしている。

さらには日野祭曳山囃子を様々な機会に演奏し世間に広くPRしていこうという活動も行っている。各町で共通して演奏されている曲である「バカバヤシ」なども、各町によって微妙な違いがある。しかし日野祭囃子方交流会に参加している奏者はベテランの人々で、その違いを理解している。各町の伝承に混乱が生じる心配はないであろう。

日野祭全般についての調査や曳山についての調査は行われており、前出の通り報告書も発刊されている。しかし、曳山囃子についての体系的、総合的な調査は行われておらず、曳山囃子のみ報告書も発刊されていない。詳細な調査と報告書の編纂によって現状を記録しておくことが急務である。

また、調査によって新たな資料が発見されることにより、日野祭の曳山囃子の成立について説明がされ、その上で雅楽曲を取り入れた宮入の囃子についての独自性や重要性を位置づける必要がある。

謝辞

日野祭曳山囃子に「賀殿」という曲があり、それが明らかに雅楽の「賀殿急」を元にしていてわかったのは、日野町史編さん室に嘱託職員として勤務していた二〇〇四年ごろであったと思います。それから約五年経って、ようやく文章にまとめることができました。その間いろいろ交流があり、資料にも出会えました。

私が退職後も資料の閲覧の便宜をはかっていただき、また助言をいただいた日野町史編さん室の皆様には大変感謝しています。そして、二〇〇七年に発足した日野祭囃子方交流会にも会員として参加させていただいており、いろいろな情報交換ができ、また貴重な資料や音源を知ることができました。何よりも会の一員となることで、曳山囃子を外から眺めているだけではなく、少しは近づいて見ることができるようになったと感じています。会員の皆様にお礼申し上げます。特に大窪町の外池徹氏には会の発足以前からいろいろな情報を提供していただき、日野祭当日も解説をしていただきました。心から深謝申し上げます。最後に筆

の進みが遅い私を根気強く待っていただき、また、多大なるご助言をいただきました。当センターの田井竜一准教授に御礼申し上げます。

注

- 1 日野祭全体については〔日野祭調査委員会編 一九七七〕や〔日野町史編さん委員会編 二〇〇八〕に詳細に解説されている。
- 2 「バカバヤシ」「ヤタイ」「オオマ」については、各町で共通する曲目であるが、表記方法が町によって「馬鹿囃子」や「ばかばやし」などとなるため、カタカナ表記とした。
- 3 「賀殿」の表記は「加殿」「ガデン」などもある。
- 4 〔滋賀県水口町立歴史民俗資料館編 二〇〇三〕の付録CD・DISC4に「ガデン上」が収録されている。
- 5 越川町文書に「引山拍子」という表題で「前川楽」と「陵王」の笛の唱歌譜と太鼓譜が収録されている。
- 6 〔木田辰治郎記 西村泰郎 二〇〇二〕は大窪町に在住していた木田辰治郎氏が昭和二十九年に明治時代の日野祭を回想し記した、ガリ版刷の冊子を西村泰郎氏が復刻したものである。「町内の方の参考になれば」との思いで復刻されたようである。大窪町文書に収められている。
- 7 〔日野町教育会 一九三〇〕巻下所収の翻刻を抜粋して掲載した。
- 8 〔馬見岡綿向神社文書〕に残される、この史料や伝授状などは、江戸時代における雅楽の地方への伝播の例として大変貴重な資料であるが、この分析については別稿で行いたい。

参考文献

- 木田辰治郎記、西村泰郎編 二〇〇一 『明治晩年頃のお祭りの記 大窪町曳山について』、滋賀県日野町、西村泰郎。
- 滋賀県水口町立歴史民俗資料館編集 二〇〇三 『水口曳山囃子Ⅱ―曳山を囃し、人を囃し・町を囃す』、滋賀県水口町、滋賀県水口町教育委員会。
- 東儀文礼編輯 一八九四 『雅楽集 龍笛譜』、東京、鳳明会。
- 田井竜一 二〇〇一 『水口曳山囃子の諸相』、滋賀県水口町立歴史民俗資料館編集 二〇〇三 『水口曳山囃子Ⅰ―曳山を囃し・人を囃し・町を囃す』、滋賀県水口町、滋賀県水口町教育委員会。

田井竜一 二〇〇三 「近江の曳山囃子」、滋賀県水口町立歴史民俗資料館編集 『水口曳山囃子Ⅱ―曳山を囃し・人を囃し・町を囃す』、滋賀県水口町、滋賀県水口町教育委員会。

田井竜一 二〇〇五 「水口曳山囃子の成立と展開」、植木行宣・田井竜一編 『都市の祭礼―山・鉦・屋台と囃子―』、東京、岩田書院 二五三―二九一。

日野町教育委員会編集 一九九〇 『日野曳山調査報告書』、滋賀県日野町、日野町教育委員会。

日野町教育会 一九三〇 『近江日野町志 巻下』、滋賀県日野町、滋賀県日野町教育会。

日野町史編さん委員会編集 二〇〇七 『近江日野の歴史 第五巻 文化財編』、滋賀県日野町、滋賀県日野町。

日野町史編さん委員会編集 二〇〇八 『近江日野の歴史 第六巻 民俗編』、滋賀県日野町、滋賀県日野町。

日野祭調査委員会編集 一九七七 『近江日野祭』、滋賀県日野町、日野町教育委員会。

Adoption of the music of *Gagaku* in *Hinomatsuri-Hikiyama-Bayashi*

SAITOO Hisashi

The Hino festival is held as an annual festival of spring of *Umamiokawatamukijinjya* shrine in the Shiga Prefecture Gamoo-gun Hino-choo. Two procession of the procession of the child that is called *Kamiko* and the portable shrine and the procession of the festival floats called *Hikiyama* feature in the Hino festival. The musical band is done to the tour of the *Hikiyama*. As for the tune of the tour that becomes a main, the tune of *Edo-Bayashi* is used. However, peculiar tunes other than the tune of *Edo-Bayashi* are often used in to enter the shrine that called *Miyairi*. There are some tunes thought to have been taken from traditional court music to the tune of *Miyairi*. The tune performed now is only one. However, another has three tunes that can be confirmed from the music score and the recording. The ceremony is held as a chance to come to take these tunes in *Umamiokawatamukijinjya* shrine in 1804. Traditional court music was performed in this ceremony. In Hino, musicians who performed in the ceremony are tradesmen. Whether the tradesmen having been instructed in by musicians in *Tennoji* and *Nanto* took the traditional court music tune to the *Hikiyama* musical band is thought.

Keywords: *Umamiokawatamukijinjya* shrine, Shiga Prefecture Hino-choo, *Edo-Bayashi*, *Katen*, *Ryouoo*, *Shougafu*

